

## 自由貨幣のさまざまなカタチ

泉 留維（いずみ・るい）

シルビオ・ゲゼルが提案した自由貨幣とは、時間の経過と共に減価する貨幣であり、保有されることがない、保有が損失を生み出すであろう貨幣のことであるが、実際に減価させる仕組みには様々なカタチがある。現在、紙券ベースの地域通貨で減価の仕組みを導入しているものは少なくとも日本ではないが、MAAS（マース）券のように一定期間を経ると価値が上がっていくような全く逆の増価型の仕組みはすでに始まっている。基本的には、増価させるのも減価させるのもどちらの機能も紙券ベースの地域通貨システムに組み込むことは簡単であるが、要はプレイヤーの関わり具合や紙券の発行・入手方法の相違によって生じる公平性等の問題にどの程度それぞれのシステムがアプローチするかによって組み込みの有無や具合、組み込み方が変わってくる。ここでは少し歴史をさかのぼり、ゲゼル自身が提案した貨幣に内在させた減価の仕組みについて簡単に紹介する。

自由貨幣の原理を導入する方法として、主に4つ挙げることができる。それは、カレンダー式自由貨幣、スタンプ添付型自由貨幣、シリアル自由貨幣、補充式自由貨幣である。それぞれゲゼルの様々な著作で取り上げられているのだが、最も初期に提案されたのは、カレンダー式自由貨幣である。貨幣を使わないで蓄蔵しておく、当初は100単位の価値を持ったものが一年後には90単位の価値を自動的に減じるようなものである。このカレンダー式自由貨幣は、紙券の流通価値が紙券そのものに印刷されている。例えば、「1890年1月1日 100マルク、1月2日 99.97マルク、・・・1月31日 99.10マルク、・・・10月31日 94マルク、・・・12月31日 90マルク」と紙券に印刷されているのである。この仕組みでは、貨幣の額面価値の一部が、時間の経過と共にどこかへ消えていくのである。

2002年1月1日 1000円	2002年11月1日 750円
2002年3月1日 950円	
2002年5月1日 900円	
2002年7月1日 850円	
2002年9月1日 800円	

この券は2002年12月31日に無効となりますので、交換所で新規の券と交換してください。

また、ほぼ同時期に提案されたシリアル自由貨幣は、ゲゼルの著作において「10枚綴りの小額紙幣が印刷される。この紙幣シリーズは、それぞれ特徴的な色が付けられていて、1年間通して5、10、50ペニヒの額面価値を保つが、年末になると10枚綴りのうち特定のシリアル番号をもつ1枚が無効になる。」と書かれている。すなわち、ある決まった間隔

で、一組で振り出された綴りの特定のシリアル（例えば下一桁が「8」とか）が打たれている一枚が使用無効になるのである。この場合、流通過程で特定の人が、大量に無効となる紙券を抱えるリスクがある。それをある程度緩和するため、無効となった券も持ってきた人になんらかの代償を支払う必要があるだろう。基本的には少額面に向けた仕組みである。

10 円 (1001)	10 円 (1002)	10 円 (1003)	10 円 (1004)	10 円 (1005)
----------------	----------------	----------------	----------------	----------------

自由貨幣の中で一番有名なのが、ゲゼルが『自然的経済秩序』（第二版以降）で記したスタンプ添付型自由貨幣である。印紙のような小さな紙券を紙幣に貼付して、減価させるものである。カレンダー式自由貨幣では、額面価値は一定ではなく、また端数が出るため使用しにくいという面があったが、このスタンプ添付型自由貨幣では額面価値は一定である。紙券には多数の枠目が印刷してあり、一定期間ごとにある一定額のスタンプを所定の場所で購入して、空白のマスの順次貼り付けていくのである。この仕組みでは、スタンプの収益によって一定期間後、発行したスタンプ添付型自由貨幣を償却することができる。1930年代ヨーロッパ各地で地域発の経済循環の回復方法としてこの方式の自由貨幣が導入された。国民通貨が退蔵され十分な機能を果たさない中で、自由貨幣を補完通貨として活用し、それによって国民通貨の「流通速度」を上昇させようとしたのである。

<b>10</b>	4 月	2002 年	7 月	10 月
2 月	5 月	<b>1000 円</b>	8 月	11 月
3 月	6 月		9 月	12 月

最後に補充式自由貨幣であるが、これはスタンプ添付型自由貨幣の亜種である。紙券の見かけはほぼ同じであるが、スタンプの貼付の仕方が違っている。すなわち、取引毎にスタンプを貼るという一種の物品税が課せられる仕組みである。歴史的に見れば 1930 年代のアメリカにおいて地方自治体が徴税手段の 1 つとして導入している。

これら 4 つの仕組みは、それぞれメリットとデメリットを持ち合わせている。歴史的には、スタンプ添付型自由貨幣が大々的に取り上げられ、1930 年代ヨーロッパ各地で導入されたが、常にこの仕組みのみが有効なわけではない。カレンダー式自由貨幣のように自動

的に価値が消滅していく仕組みの方が有効な場合もあろうし、20 世紀前半の自由貨幣の試案にはないが例えば口座型の地域通貨の仕組みと併用した場合は全く違った減価の仕組み、口座の方を減価させるといったことの方が有効な場合もあろう。

2002 年 6 月 1 日